

「二〇一三年中文数字出版与数字図書館（CDPDL）国際 研究会」参加記

金城 未来

シルクロードの中継地として栄えた街、敦煌。中原と西域とを結ぶ文化的、また軍事的拠点として、古来多くの人々が行き交ったこの地で、「二〇一三年中文数字出版与数字図書館（CDPDL）国際研究会（中文デジタルパブリッシングとデジタルライブラリー国際シンポジウム）」（http://gb.versea.cn/1.net/kns55/2013_Seminar/gb/Default.htm）が開催された。

情報化・グローバル化が急速に進展する今日、インターネットを利用した情報提供や独自の検索システムを公開する機関が、日々増大している。そのため、筆者は、今後自身の研究を進める上でも、これらのコンテンツを理解し、活用することが必要不可欠であると考え、本シンポジウムへの参加を決定した。また、参加するからには、この機会に、日本の公共・専門機関におけるデジタル化の現状と課題とを世界に向けて

発信する必要性も感じた。さらに、世界各国の図書館における最新の技術と、デジタルアーカイブの水準を、自身の目で確認したいという好奇心もあった。このような思いが、筆者を研究会へと駆り立てたのである。

■研究会の概要

本シンポジウムは、各国の図書館・出版関係者、さらには中国を研究対象とする研究者が、中国関連文献・文物のデジタルリソース構築やサービスモデルの最新の成果を共有し、新たな情報サービスモデルについて共に検討することを趣旨とする。清華大学図書館・香港大学図書館・敦煌研究院・中国学術期刊電子雜誌社の共同主催で、会議は同方知網（北京）技術有限公司の運営のもと進められた。中国学術期刊電

子雑誌社、および同方知網技術有限公司は、CNKI (China National Knowledge Infrastructure) と呼ばれる中国最大の学術文献オンラインデータベースの公開に携わる機関である。ここでは、学術雑誌や学位論文はもちろんのこと、新聞や統計年鑑に至るまで幅広い内容の情報を提供しており、筆者も日頃より活用させて頂いている。そのような機関が中心となつて開催する本会は、まさに中国のデジタル化を先導するものと期待できるだろう。

五月下旬、筆者はシンポジウムに参加するため、まずは発表演定の論文を主催者側へ提出し、審査を受けた。その結果、無事審査を通過し、シンポジウムでは、筆者を含め三四人の発表が認められた。会議における使用言語は、中国語か英語のいずれか。「会議手冊(ハンドブック)」によれば、中国やアメリカ・韓国など世界一八カ国から総勢約四〇〇人が参加していたという。しかし、日本からの参加者は筆者を含め、僅か四名に過ぎなかった。開催時期や開催地の問題もあろうが、このような国際研討会に、日本の図書館や大学・公共機関関係者がほとんど参加していなかったことは、些か残念な思いである。

研討会は、二日間にわたって開催された。七月一日に行われた初日の全体会議は、四つのセッションに分けられ、筆

者を含む計二四名が発表した。各セッションは、それぞれ「大数据時代の数字出版」、「中文数字出版与数字资源建设」、「中文数字图书馆与中国学研究」、「数字馆藏建设及服务模式」と大きなテーマで括られ、発表者が次々と壇上上がり、自らの見解を述べた。この初日の報告の中、筆者が特に興味深く感じたのは、中華書局副編集長・顧青氏の「中文古籍数字化建设与图书馆应用」である。顧氏は、古籍のデジタル化は、丁寧な整理作業を行った上で進められねばならないことや、整理された文献が著作権の保護を受けること、また中国語で記された古籍をデジタル化する上で、いくつかの規準を設ける必要があることなどを説かれた。筆者は、普段、中文古籍を取り扱い研究を進めている身であるため、どの指摘も納得させられるものであった。その他、人民出版社(党委副書記・沈水荣氏「現代知識资源开发与党政图书馆建设实践」)や、湖南出版投資控股集团(博士後研究員・任殿順氏「我国数字出版產業的真實与幻象」)、商務印書館商易華信息技術有限公司(總經理・孫述学氏「雜誌的雜誌、精品的精品——商務印書館民國期刊『東方雜誌』全文数据库介紹」)など、多くの出版関係者の発表を聞くことができたことは、大変有意義であった。また、アメリカ(コロラド大学東アジア図書館館長・李想氏「対北美術図書館電子書「用戶驅動採購」模式的考察」)やカナダ(ブリテイッシュ

コロンビア大学アジア図書館代理館長・劉靜氏「通過英属哥倫比亞大学的数字資源從事中国研究」、韓国（韓国科学技術信息研究院首席研究員・金正煥氏「K E S L I 図書館聯盟和電子書在韓国的使用模式」など、各国の図書館がどのようなシステムを用い、特徴的なデジタルサービスを行っているか窺うことができたことも大きな収穫であった。

翌七月一二日、会議二日目は、三つの分科会に分かれて報告・討論が行われた。各パネルのテーマは、それぞれ「数字敦煌与世界文化遺產」、「数字出版「走出去」研讨会」、「面向農業現代化建設的「三農」知識服務」である。中でも第一パネル「数字敦煌与世界文化遺產」では、会議の開催地に因み、敦煌より出土した文物に関するデジタル化の発表が多く見られた。特に、敦煌研究院常務副院長・王旭東氏が、「「数字敦煌」回願与展望」と題する発表を行い、我々はデジタル化によって、人類の文化遺產を永久に受け継いでいく義務を負っている」と話されたことが印象的であった。また、周欣平氏「石窟壁画及敦煌研究数字資源保障体系」（加州大学伯克利分校東亞図書館館長）や呉健氏「文化遺產与数字化」（敦煌研究院数字化中心主任）、夏生平「敦煌学特色信息資源庫的構建」（敦煌研究院信息資料中心副主任）もそれぞれ、敦煌より出土した文物の発掘および保存過程や、現在どのようにそれらのデジタル

化が進められているかなど、視聴覚資料も交えて詳述された。

■デジタル化の意義と問題点

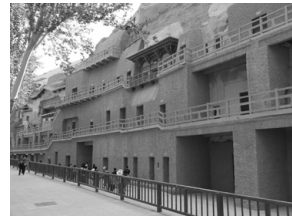
以上、二日にわたるシンポジウムの概要を述べたが、以下に僅かばかり、筆者がこの会議で発表した内容について触れておきたい。筆者は初日の全体会議の最終報告者として発表する機会を得た。そこで、「日本における漢籍デジタル図版の公開状況とその意義（原題…日本漢籍数字図版的公開状況及其意義）」と題し、筆者が日頃、研究対象としている漢籍について、日本の公共機関や大学関連機関が無料でインターネット上に全画像を公開するデジタル図版を紹介すると同時に、それらデジタル図版公開の意義と問題点について管見を述べた。なぜ、ここでデジタル図版（画像データ）に限定したのかと言えば、すでに翻刻されたテキスト資料には、その翻刻に誤りがないか、また実物の形制はどのようになっているか等、研究対象となる文献を確認する必要があるが、対象物そのものの画像を確認できれば、このような作業がスムーズに行え、研究活動の能率が飛躍的に上がると考えられるためである。すなわち、研究者にとって、デジタル公開された図版の価値は、電子テキストデータと並び、極めて大きいと言える。

まず、報告ではパワーポイントを用い、漢籍のデジタル図版を公開する研究機関を国立・公立・大学関連機関の三つに分けて紹介し（計二四機関）、またそれぞれ主にどのような漢籍のデジタル図版が公開されているか提示した。

次に、漢籍デジタル図版公開の意義として、①資料保存と情報提供の促進、②利便性を挙げた。①では、従来、貴重書に関しては、文献の保存と公開とのバランスが問題視されてきたが、貴重書のデジタル画像をインターネット上に公開することで、これら資料保存と情報公開の両面が促進できるところを指摘した。また、中国で早くに散佚したとされながら、今日まで日本でその命脈を保っている文献の存在を紹介し、日本のみならず、世界各国から閲覧可能であるウェブ上に、これらの漢籍のデジタル図版を公開することには大きな意義があると述べた。②では、デジタル図版としてウェブ上に研究対象（漢籍図版）が公開された場合、利用者は所蔵機関の開館時間を気にしたり、許可申請に時間を割くことなく、自身の都合の良い時間に自由に閲覧することができることを指摘した。

また、漢籍デジタル図版を使用する上での問題点としては、①公開画像の問題、②検索機能に関する問題、③デジタルコンテンツの発信に関する問題を取り上げた。①では、各機関

が公開するデジタル図版の画像中には、文献の拡大や縮小ができない、あるいは拡大できたとしても、細かい文字までは判読できないものがあること、また、ネット上のリンクが切れていて、画像データに辿り着けないサイトや、一つの漢籍全体がデジタル化されているわけではなく、ネット上での公開箇所がその文献の一部に限定されているものがあること、さらに、画質は良いものの、そのせいで目的の画像がサイト上でなかなか開かず、閲覧に長時間要するサイトがあることなどを述べた。これらはデジタル公開ならではの問題であり、どこまでのレベルをデジタル図版に求めるかという観点から、公開する機関および閲覧者ともに、注意しなければならぬ問題であると考えられる。続いて②では、漢籍のデジタル図版を伝統的の四部分類ではなく、日本十進分類法によって検索しなければならぬサイトが存在することや、各研究機関に収蔵されたデータを、それらの機関を越えて横断的に検索するシステムが構築されていないため、使用に便ならざる点があることなどについて説明した。また③では、一部の所蔵機関が、デジタル漢籍画像の利用を積極的に呼びかけている一方、デジタル図版を公開していること自体があまり知られていない機関や、特に情報発信に力を入れているわけではないサイトが見受けられることを指摘した。デジタル図版を



作成しても、その存在が一般的に認知されていなければ、情報公開の面で立ち後れ、研究促進にもなかなか繋がりにくくなるであろう。

以上が筆者の報告の概要である。発表後には、多くの方々にお声かけ頂き、交流する機会を得られた。この発表で、筆者は主に研究者として、デジタルコンテンツを利用する立場から意見を述べたが、本シンポジウムに参加することで、普段あまり接点のない図書館や出版関連の、いわば情報やサービスを提供する側の方々と議論を交わすことができたことには、大きな刺激を受けた。なお、光栄なことに、筆者の論文は本会において「優秀学術論文」に選出され、表彰された。お世話になった方々に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

■多様な文化の入り交じる都市、敦煌

また、本シンポジウムでは、二日間にわたる会議の終了後に、文化考察として、世界遺産の「敦煌莫高窟」と、そこから出土した様々な文物を収蔵する「敦煌市博物館」を訪問することができた。莫高窟では、美しい色彩の壁画を見、またソグドやウイグル系のエキゾチックな顔立ちをした像を目の当たりにして、この地がまさに交易の中心地であったこと、人々が仏教を深く信仰したことを示す貴重な文化遺産の残された都市であったことを実感した。さらに、多くの経典や文書が出土した第一七窟（藏経洞）を実際に観覧できたことは、感無量であった。これまで書物でしか目にするこのできなかった光景が、急速に色彩を帯びてゆく感覚。これは、敦煌市博物館に収められた数多くの文献および文物に触れた時も、同様に湧き起こった感慨である。歴史の重みを感じると同時に、このような文化遺産をいかにして保護しつつ、広く世界に情報提供していくか。このシンポジウムに参加して、改めてデジタル化の意義を考えさせられた。

(きんじょう・みき 大阪大学)